

KOMAZAWA HAMAMATSU

駒澤大学3-0浜松大学

先制点をあげた赤嶺（写真左）
を中心に歓喜の輪が広がる
（撮影・野澤俊介）



赤嶺ハットトリック！ 完封勝利で準決勝進出！！

これで総理大臣杯じつに
10連勝！！

3-0。結果だけを見れば完勝だが試合後の選手たちに笑顔はなかった。「前半は最悪だった。いつ点を取られてもおかしくなかった」（中後）、「得点は3点入ったがすべてが納得のいく試合ではなかった」（鈴木祐）と口をついて出る言葉は反省の弁ばかり。秋田監督も「まだまだま勝っているだけ。駒大らしいサッカーをしたい」と語った。

試合は前半早々に動く。11分、小林亮のセンタリングを赤嶺がディフェンスと競りながらもボレーシュート。これが豪快に決まり先制。幸先の良いスタートを切った。しかし、その後は「イージーなミスなどで勢いを失った感がある」（中後）というように攻撃も決定的な場面を迎えるが得点できず。守備も用意なファウルから相手にチャンスにあたえ終了間際には決定的なシーンを作られてしまう。

後半、「しっかりやることをやろうと確認した」（中後）駒大は浜松大を圧倒。鈴木亮、中嶋が立て続けに決定機を作ると6分東平のセンタリングを赤嶺が今度はヘディングでゴール。駒大に有望の追加点をもたらした。赤嶺はその3分後にもゴールを奪いハットトリック。エースとしての存在感を存分に発揮した。試合はそのまま終了し、駒大は危なげなく準決勝に進出。前人未踏の3連覇にまた一歩近づいた。

連戦の疲れが癒えぬとはいえその試合内容には各選手不満を感じていた。試合後、反省点はばかりを嘆く選手たちだったがそれは逆を言えば頂点を見据えているからこそ。そのあくまで貪欲な姿、向上心がチームをさらにもう一つ上のチームへと変貌させる。そうして成長しながら駒大は2連覇してきた。今年も一試合一試合の真剣勝負が駒大を「戦う集団」へ変貌させる。9日、駒大は関東選手権で苦汁をなめた明大と天皇杯出場権をかけて対戦する。